

学習意欲を高める授業の工夫についての研究 —生活科「なつやさいをそだてよう！」の実践を通して—

野田 敦敬* 奥村 一将**

*生活科教育講座 **愛知教育大学 大学院

Devices for Enhancing Children's Willingness to Learn in Class

Atsunori NODA* Kazumasa OKUMURA**

*Department of Life Environment Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

**Graduate Student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

本研究では、児童の学習意欲を高めるために、「成就感」と「受容感」を育むことを意識しながら生活科「なつやさいをそだてよう！」の授業実践に補助教員として参加し、概要、成果、課題等を示した。成果としては、初めは栽培にあまり関心を示さなかった児童が、意欲的に活動を行い、学びを家庭でも活かそうとするように成長した姿や、「受容感」を得ることで、より大きな「成就感」を得ている姿が見られるようになった。「成就感」と「受容感」とは、筆者がこれまでの文献調査等の研究から、自ら学ぶ意欲を育むための直接的な二つの要素として定義したものである。

Keywords：生活科、意欲、成就感、受容感、栽培活動

I 研究の目的

平成20年1月中央教育審議会は、学力の重要な要素である学習意欲やねばり強く課題に取り組む態度自体に個人差が広がっているといった課題をPISA調査の結果から指摘し、自分に対する自信の欠如を学習意欲が高まらないことの一因として挙げた¹⁾。

生活科の究極的な目標は、「学習上の自立」「生活上の自立」「精神的な自立」という3本の柱からなる自立への基礎を養うことである。小学校学習指導要領解説生活編では、「学習上の自立」を、「自分にとって興味・関心があり、価値があると感じられる学習活動を自ら進んで表現できるということであり、自分の思いや考えなどを適切な方法で表現できる²⁾」と定義し、「精神的な自立」を「自分のよさや可能性に気付き、意欲や自信をもつことによって、現在及び将来における自分自身の在り方に夢や希望をもち、自ら前向きに生活することができる³⁾」と定義している。学習の価値を自ら見出して前向きに生活することを目標とする生活科は、学習意欲を向上させる働きかけを特に重要視している教科であると捉えることができる。

生活科の中で自立への基礎を養うことによって、他学年や他教科での学習においても、自らが学習の価値を見出しながら意欲的に学習する姿が期待できる。よって、児童の学習意欲の高まりを意識しながら生活科の授業を展開していくことが、学校教育全体において大きな価値のあるものになると考えられる。

まず、児童の学習意欲の高まりを捉えるためには「意欲」についての概念を明確にする必要がある。鹿毛(2007)は、「効力感」「受容感」「必要感」「有能感」の四つの学習意欲を支える要素を挙げると共に、「学びと自分の接点が存在し、学びが自己に意味づくとき、人はこだわりをもって、切実さを感じて自ら進んで学ぼうとする⁴⁾」と述べており、人は何らかの「こだわり」をもつことで、学ぶ意味や必要性が当人に生じて自ら学ぼうとするようになるとしている。筆者は鹿毛(2007)の理論や、他の文献調査を元に、生活科における自ら学ぶ意欲を育むための直接的な要素を、「成就感」と「受容感」の二つに大別した。⁵⁾

「成就感」は、「自己像または学ぶ対象や内容」にこだわりをもって、物事を達成したという成果や、できるようになっていく経験など自身の成長の実感を通し

て得る感覚である。「受容感」は、「人間関係」にこだわりをもって、自らの個性が受け入れられ、自分の成長が周囲によって支えられているという実感を通して生まれる感覚である。子どもの思いや願い、そして他者とのかかわりを大切にする生活科においては、この「成就感」と「受容感」の両者の意欲によって、児童の学びが支えられていると考えられる。

先行研究として平成21年6～7月に行った生活科における児童の関心・意欲についての実態調査の結果から、植物の栽培活動については「関心」を持たせやすいと感じている教師が多いが、「意欲」は持続させにくいと感じている教師も多いことが分かった。⁶⁾

児童の学習意欲を高めるために、「成就感」と「受容感」を育むことを意識して栽培活動の授業実践を刈谷市立F小学校第2学年で行った。

本論文では、まず活動前の児童への実態調査を踏まえ、「成就感」と「受容感」を育むことを意識した実践の様子を記す。その後、実践後のアンケート及び、児童の「成就感」や「受容感」が変容する様子から、「成就感」及び「受容感」と学習意欲とのかかわりや、「成就感」と「受容感」の相互関係についての特性をより明確にすることを研究の目的とする。

II 活動前の児童への実態調査

1 調査目的

児童の家庭で野菜を育てた経験や、野菜や栽培に対する意識を把握し、授業実践に生かす。

2 調査対象

第2学年 1学級 25名

3 調査方法及び内容

質問紙調査によって行った。「①家で野菜を育てたことがありますか」「②あなたは野菜が好きですか。」「③野菜を育ててみたいですか。」という項目を立てた。①の項目は、「はい」「いいえ」のどちらかを選択し、「はい」と回答した児童には育てた野菜の種類を書くように指示した。②の項目は、「すき」「きらい」「どちらでもない」の中から一つ選択し、その理由も回答する。③の項目も同様に、「はい」「いいえ」「どちらでもない」の中から一つ選択し、その理由を回答するようにした。

4 調査結果及び分析

図1は、家で野菜を育てたことがあるかについての調査結果である。7割を超える児童が、家庭で野菜を栽培した経験があると回答した。鉢でミニトマトやナスなどを育てている家庭から、畑でトマトやキュウリ、サツマイモなど多くの種類を育てている家庭まであり、野菜を育てる種類や規模は様々であった。

図2は、児童に野菜が好きか尋ねた調査結果である。半数の児童は「すき」と回答し、「野菜を食べるとパワーがでるから」「さっぱりしてしゃきしゃきだから」な

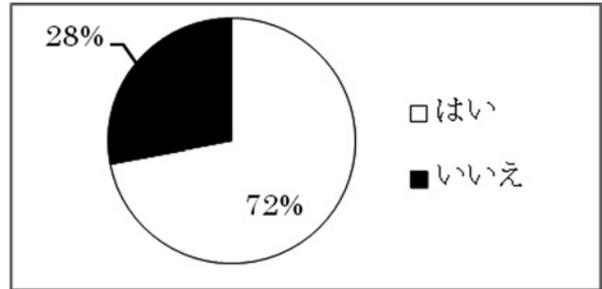


図1 家で野菜を育てたことがあるか

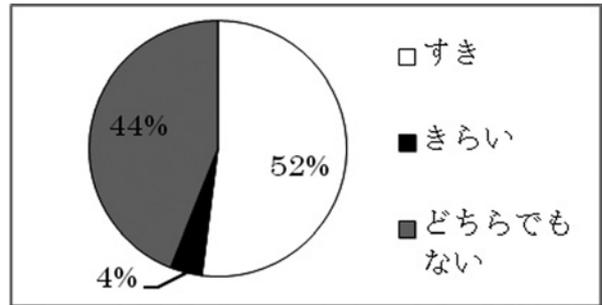


図2 野菜が好きか

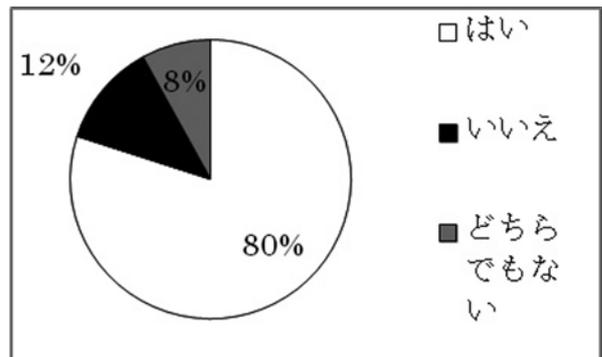


図3 野菜を育ててみたいか

ど具体的に好きである理由を答える児童もいた。反対に、「きらい」と回答した児童が1名で、その理由は「ナスとセロリのおいが嫌い」というもので、嫌いな種類の野菜のインパクトが強いため、野菜そのものを「きらい」と認識していると推測できる。「どちらでもない」と回答した児童が44%とやや多く、その理由の多くは「好きな野菜もあるけど、嫌いな野菜もあるから」というものであった。

図3は、これから野菜を育ててみたいかについての調査結果である。「はい」と回答した児童が8割に及び、全体的に野菜の栽培への関心が高い様子が伺える。「いいえ」と回答した児童は12%で、「水に濡れるし外に行くのが嫌だから」「はたけをつくるのがめんどくさい」等の理由であった。「どちらでもない」と回答した児童は、理由の欄に「うちでも作っているから」と記した。

学区には畑が多く見られ、多くの家庭で野菜を栽培していることから、当地域は野菜の栽培を身近に感じ

表1 授業実践の概要

月	主な活動	成 成 就 感 を 得 る 活 動	受 受 容 感 を 得 る 活 動
「なつやさいをそだてよう！」(全21時間+随時)			
4	<p>どんな野菜を作ろう (2時間)</p> <p>成 野菜に関する絵本の読み聞かせを聞く。</p> <p>成 ミニトマト、ナス、ピーマンの中から育てる野菜を選び、どんな野菜になってほしいか考え、育った野菜を想像して絵を描く。</p>		
5	<p>野菜の苗植えをしよう (4時間)</p> <p>受 野菜の達人に教わりながら一人一鉢ずつ苗を植え、これからの世話の仕方について、教えてもらう。</p> <p>成 植えた苗を見ながら、野菜に名前をつける。</p> <p>受 4～5人のグループごとに、トマト、キュウリ、サツマイモ、ラッカセイの四種の野菜を畑に植え、グループでそれぞれの野菜に名前をつける。</p>		
6	<p>野菜のお世話をしよう (6時間+随時)</p> <p>成 視点・観点のアイコンを設定した観察カードを活用し、生長の様子を観察する。</p> <p>成 教室に置いてある野菜に関する本を活用し、気になることや困ったこと等を調べる。</p> <p>受 クラスで世話の仕方について伝え合う。</p> <p>受 学年共有のスペースに掲示板を設け、野菜を美味しく育てるコツについて付箋に書いて野菜の種類ごとに貼る。</p>		
7	<p>野菜の達人にお礼の手紙を書こう (2時間)</p> <p>成・受 野菜の世話の仕方を教えてくれた、農協の方や、畑を耕してくれたTTの先生にお礼の手紙を書く。</p>		<p>収穫祭の計画をしよう (4時間)</p> <p>受 グループで、収穫した野菜を食べる場所や方法を計画する。</p> <p>受 クラス全体で、収穫した野菜を食べる場所を決定する。</p> <p>成・受 グループで、収穫祭で発表する野菜の出し物について計画し、練習する。</p>
	<p>夏の収穫祭をしよう (3時間)</p> <p>成・受 屋外で育てた野菜を調理して食べる。</p> <p>成・受 グループで、野菜に関する出し物を発表し合う。</p>		

ている児童が多いと考えられる。この環境を活かし、野菜の栽培経験の豊富な家族や地域の人などと関わりながら、栽培活動を展開していくことによって、「受容感」を得ながら成長する児童の姿が期待できる。また、家庭での手伝いとしてではなく、児童の主體的な栽培活動を通して確かな「成就感」を与え、主體的に活動することのよさを実感しながら、野菜に愛着を持つ児童の姿を目標に授業を展開していく必要がある。

Ⅲ 授業実践とその分析

刈谷市立F小学校第2学年1組A教諭の授業に補助教員として筆者が参加した。自身の成長を通して得る意欲である「成就感」と、自分の成長が周囲によって支えられているという「受容感」を育むことを意識して栽培活動の授業を組み立てた。

1 実践の概要

授業実践の概要は表1に示す。

2 実践の様子

(1) どんな野菜を作ろう

野菜との出会いを魅力的なものにするために、『やさいのおなか』⁷⁾『あっちゃんのはたけ』⁸⁾の2冊の読み聞かせを行った。『やさいのおなか』は、色々な野菜の切り口がシルエットクイズになっており、「これ、なんだ」とクイズ形式で進んでいく絵本である。ページをめくると、児童らは思い思いの予想を発言し、答えを知ると喜んで驚いたりしており、盛り上がりながらも絵本の野菜に集中していた。

子どもがおばあちゃんに習ってきゅうりを育てるというエピソードの『あっちゃんのはたけ』の読み聞かせでは、序盤は少しざわついていたが、キュウリの実ができたシーンになると集中力が増し、絵本に対する児童の真剣な眼差しから、野菜の栽培に関心をもつ姿が伺えた(図4)。

児童が野菜の栽培に関心を持ったところで、鉢で育てる野菜を、ミニトマト、ナス、ピーマンの中から各自選び、どのような野菜になってほしいか絵と文で表現した。「大きいピーマンになってほしい」と願い紙面いっぱい大きさのピーマンを描く子や、「あまくておいしいミニトマトにしたい」と願って丁寧に色塗りをする子など、様々な思いが絵や文に表れていたことから、一人一人が自分なりの思いをもつ様子を見ることができた。

単元の導入で児童が一人ひとりの思いや願いをもった姿から以降の活動で確かな「成就感」を得ていく姿が期待できた。

(2) 野菜の苗植えをしよう

農協より、「野菜の達人」としてゲストティーチャーを招き、苗の植え方や世話の仕方について丁寧に教えて頂き、児童に一人一鉢ずつの苗をプレゼントとして頂いた(図5)。自分自身の手で、一人一鉢ずつ苗を植える場面で、ある児童は土の量について「もう少し入れる?」「これくらい?」と達人に心配そうに聞きながら作業を進め、達人の「いいね!」という言葉を聞くと、児童は「受容感」を感じた様子で、安心して次の活動に移った。

自分が植えた苗に名前をつける場面では、「ミニちゃん」「ナーくん」「ピロまる」等、児童一人ひとり好きな名前を考えて付けた。また、ナスを大きく育てたいという気持ちを「デカ王」という名前に表す児童もあり、名前自体に児童の思いが反映されているものも見られた。

児童間の「受容感」を育むことをねらい、4~5人のグループで畑にトマト、キュウリ、サツマイモ、ラッカセイの4種の野菜を畑に植え、グループで話し合っ



図4 読み聞かせの様子



図5 野菜の達人の話を聞く様子

育てたい」気持ちを共有し、トマトに「デカシャキくん」と名付けたグループがあった。

(3) 野菜のお世話をしよう

児童に「成就感」を与えるために、栽培を通して多くの「気付き」を得る手立てを講じた。

観察カードに『見て気付いたこと』『さわって気付いたこと』『そのほか気付いたこと』『こうなってほしい』という四つの視点・観点をあらかじめ設定した(図6)。「くきの部分がざらざらだった」「トマトのにおいがした」などの諸感覚を活用した対象への気付きや、「むしくいがなおってほしい」などの自分と対象とのかかわりについての気付きなど、多くの気付きが表れた。

また、学級文庫に多くの野菜に関する本を置くと、子どもたちは朝の読書タイムや休み時間を利用して積極的に野菜の本を読み、自主的に野菜の栽培について調べる様子が見えた。

6月上旬にクラスで世話の仕方について伝え合う活動を行うと、キュウリについている白っぽい粉について本で調べ、こむぎ病という病名と、たくさんの水で洗うと治るという対処法について伝える児童や、野

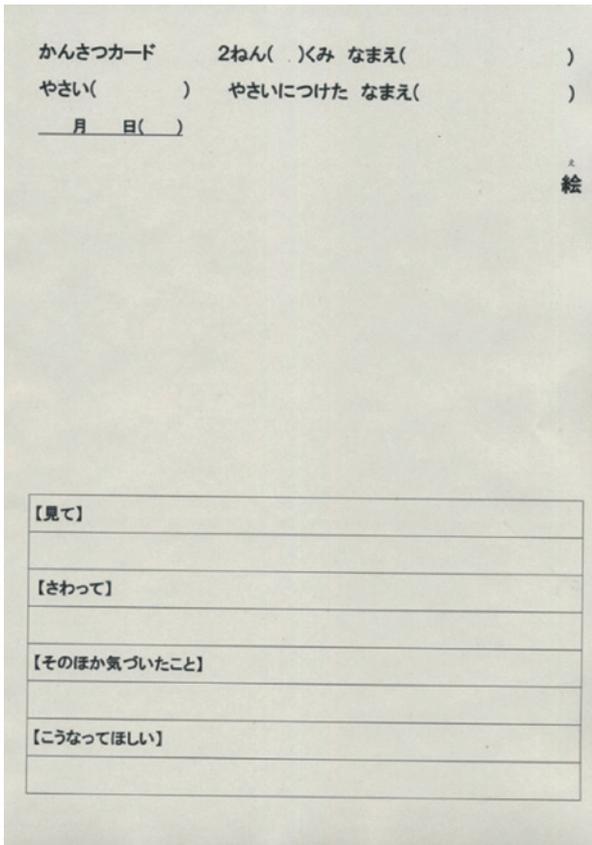


図6 視点・観点を設定した観察カード



図7 学年共有の掲示板

菜を育てているおばあちゃんから、サツマイモを育てるには土寄せが大切であると教わったことを伝える児童などがあり、クラス内での伝え合い活動を通して仲間同士で気づきを共有することで「受容感」を得ていた。

また、気づきをクラス内だけに留めず、学年全体で共有して「受容感」を高めるために、学年共有のスペースに掲示板を設けて気づきを共有できると、気づきを書いた付箋が紙面いっぱい貼られた(図7)。

(4) 収穫祭の計画をしよう

6月の中旬頃、栽培に対する意欲が低下している児童が一部現れてきたため、目的意識を再び明確にすることをねらい、児童に収穫祭の計画を促した。

グループで収穫した野菜を食べる場所や方法を計画すると、どこで、どの野菜をどのように食べるかをワークシートに書き込んだ。野菜を食べることへの思いを共有することで、グループ内で「受容感」を得ることができた。

その後、教師からの願いとして、場所のみ全てのグループで統一するように提案し、クラス全体で収穫祭を行う場所について話し合った。「調理室で作って教室で食べたい」「フルーツガーデン(校内で果物を育てている場所)で食べたい」などの意見が出た後で、「そよ風広場」というバーベキュー炉や薪、木の机・椅子などが用意してある屋外スペースで食べたいという意見が出た。そよ風広場で食べたい理由としては、「自然がいっぱい」「すずしい」「楽しそう」「いつも食べない場所」などが挙がり、他の場所で食べたいと言っていた児童の理由も包括していたため、多くの児童がこの場所で食べることに賛同した。話し合いの最後まで、「フルーツガーデンで食べたい」と熱心に主張する児童がいたが、教師が「みんなが納得する理由を言ってくれたら変更してもいいよ」と投げかけると児童は現状を受け入れ、授業後に「みんなが納得する理由を考えよう」とつぶやき、教室を出ていった。

収穫祭に行く野菜に関する出し物の発表に向けて、それぞれのグループが各自で表現方法や内容を考えた。グループ間で育てた野菜への思いを共有し、他者へ伝えることを意識した発表を考えることで「受容感」が生まれることと同時に、表現する活動を通して自らの活動を振り返り「成就感」を得ている様子が児童の活動や表情に表れていた。発表内容が決まり、画用紙に内容をまとめると、休み時間になっても自分達が納得するまで何度も発表練習を繰り返すグループもあった(図8)。



図8 グループ内で発表練習を行う様子

(5) 野菜の達人にお礼の手紙を書こう

野菜の世話を教えてくれた上、苗をプレゼントしてくれた農協の方を収穫祭で招待することになり、その時に感謝の気持ちを伝えられるようお礼の手紙を書いた。またA教諭の計らいで、補助教員として参加し、畑を耕すなどの手伝いをした筆者にも同様に手紙を書いてくれた。

手紙の内容には、感謝の気持ちが丁寧に綴られている他に、「先生と一緒に食べたいです」「みんなで力をあわせて、先生が『おいしい』とってくれるようにがんばります」等、栽培を支えてくれた人に対しての「受容感」が表れていた。

また、「立派なトマトができた」「やさしいことがもっと知りたい」等、「成就感」に関わる表現も多く見られた。手紙を書くという表現活動を通して、「受容感」を高めるほかに、これまでの活動の自信やこれからの活動への思いや願いが具体的な表れ「成就感」も同時に高まっている様子が見取れた。

(6) 夏の収穫祭をしよう

7月の中旬、鉢で育てたミニトマト、ナス、ピーマンと畑で育てたトマト、キュウリを収穫し、そよ風広場で収穫祭を行った。バーベキューや野菜入りの味噌汁を作るために、教師の支援を受けながら、児童が主体的に火おこしを行った(図9)。

バーベキューや味噌汁の他にも、サラダや漬物など、それぞれのグループの食べたい方法で育てた野菜を食べた。共に野菜を育てた仲間と楽しそうに食べる様子や、栽培を支援した教師やゲストティーチャーに調理した野菜を自ら渡し、「ここで一緒に食べて」と呼びかける児童の行動から、「受容感」が十分に高まっている様子が見取れた。

野菜を食べ終えた後、各グループで考えた野菜に関する出し物を発表し合った。今まで育てた中で気付いたこと、家族に教えてもらったこと、学級文庫に置いてある本から得た知識等を用いて野菜ニュースや野菜クイズを発表したグループの他に、あまくなっほしいという野菜への思いを歌にして、生き生きと歌うグループもあった。自分たちが主体的に育てた野菜を、自分たちが表現したい方法で発表することで、自然にそれぞれの児童が「成就感」を得る活動になった(図10)。

3 成果と課題

1) 実践後アンケートより

夏野菜の収穫祭後に、簡単なアンケートを行った。「あなたは野菜がすきですか」というアンケート結果は図11の通りである。「きらい」と回答した児童が0人になり、事前アンケートと比べ、「すき」と回答した児童が12%増加したことから、人と関わりあいな



図9 火おこしをする児童の様子



図10 野菜クイズに参加する児童の様子

がら主体的に栽培活動を行い「成就感」や「受容感」を感じることで、野菜が好きになった児童が増えたことが推測できる。

しかし、「また野菜を育ててみたいですか。」というアンケート結果は図12の通りで、事前アンケートと比べて、「いいえ」と回答した児童が8%増加し、「はい」と回答した児童は4%減少してしまった。「いいえ」と回答した児童は、その理由として「虫に食べられちゃうから」「ミニトマトの苗を育てるのを失敗したから」と記述していた。栽培の大変さを実感したことや、栽培を失敗してしまったことで「成就感」が育まなかったことが次への栽培活動への意欲が高まらなかった原因であると考えられる。

2学期以降の単元である冬野菜の栽培活動では、全ての児童に「成就感」を与えることをより心掛け、栽培の大変さを知りながらも栽培活動自体を楽しむことのできる児童を育てたい。

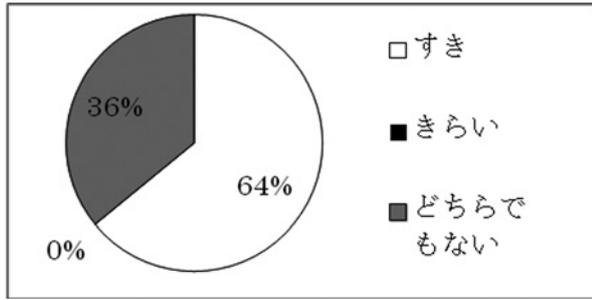


図 11 野菜が好きか

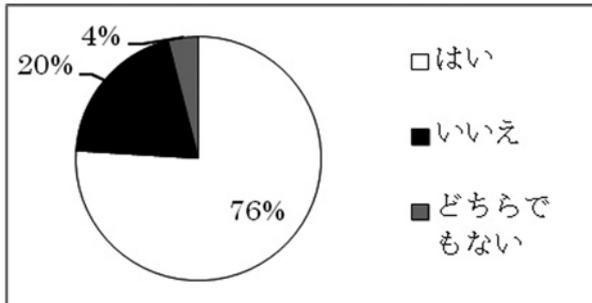


図 12 また野菜を育ててみたいか

2) 児童の様子より

ア B 児

自分の鉢に植えたミニトマトの苗に「トマちゃん」と名付け、少しくきが曲がっているミニトマトを心配している様子で、「トマちゃん元気になってね」とくきをなでている様子から、育てる野菜に愛着を持ち、元気に育てたいという「成就感」を持つ姿を見取ることができた。

野菜のお世話を行う場面では、自分のグループのトマトにアブラムシがついていることに気付きそのことを教師に伝えにきた。B 児はアブラムシがトマトに害があることに気付いていたが、虫を触ることが極度に苦手なためアブラムシを取ることができずにいた。B 児が野菜を擬人化して認識している傾向があることを捉えていた教師が、「取ってあげなきゃトマトがかわいそうだね」と投げかけると、B 児は勇気を出して素手でアブラムシを取り除き、急いで手を洗いに向かった。

児童の個性を理解し、個に応じた言葉掛けをすることで、児童の対象への主体的な行動を促し、「成就感」を高める支援に繋がった。

イ C 児

とても温厚な性格で休み時間には友達と仲良く遊ぶ姿が見られるが、普段の授業での発言はほとんどなく、学習に対する集中力が高まらない様子がしばしば伺える。また、家庭に広大な畑があり、事前アンケートの「野菜を育ててみたいですか。」という質問に対し、「うちでも作っているから」という理由で「どちらでもな

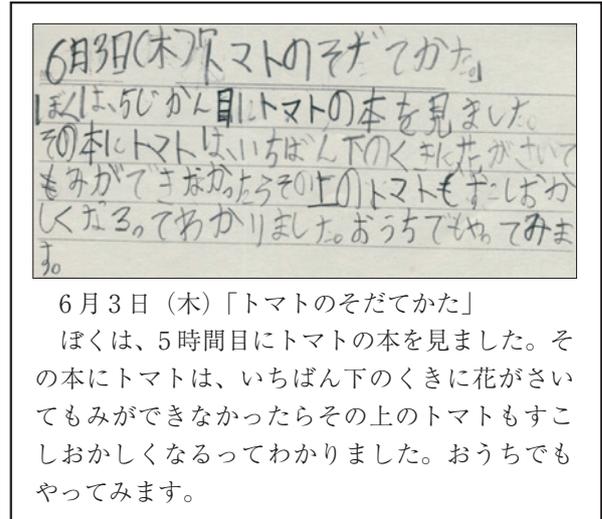


図 13 C 児のワークシート

い」と回答した。

しかし、生活科の授業で栽培活動を続けていくと、野菜に関する絵本で気に入った本を教師に薦めにきたり、休み時間の間もくもくと畑の草むしりをしたりするなど、野菜に対する意欲が高まっていく姿ははっきりと見取れ、事後アンケートでの「また野菜を育ててみたいですか。」という質問に対して「はい」と回答した。

図 13 の日記からは、授業で得た知識を家庭でも活かそうとしている様子が読み取れる。事前アンケートからは、家庭でも育てているため、学校で育てることへの関心が薄いことが読み取れたが、手伝いとしてではなく、主体的な栽培活動を通して「成就感」が高まり、学校での経験を積極的に家庭に活かそうとする姿に成長することができた。

ウ D 児と E 児

二人とも同じ栽培グループに属しており、グループ内で収穫祭の計画をする時間にはお互いの意見を共感しながら楽しそうにグループで収穫祭の計画を書き込んでいた。授業時間が終わると、一度教師に計画のワークシートを提出をしたが、D 児はまだ書き足りなかった様子で、教師にワークシートを返してもらい、一人でワークシートに書き足そうとした。それを見た E 児は激怒し、D 児が書き込んでいたワークシートを取り上げた。D 児もそれを取り替えそうとして喧嘩になったところで教師が仲裁に入った。なぜ怒っているのか E 児に尋ねると「D 児が勝手なことするから」と答えた。落ち着かせた後、詳しく二人の話を聞くと D 児が収穫祭のアイデアをどんどん書き足していきたいと考えて行動しているのに対し、E 児は収穫祭の計画はグループ全員で一緒に進めたいと望んでいることが分かった。双方の想いを理解した教師が丁寧にま

とめてお互いに伝えと、最初は感情的になっていた二人もお互いの思いを理解し、次の放課には二人で仲良く遊んでいる姿が見られた。

事前アンケートで「あなたは野菜が好きですか。」という質問に「どちらでもない」と回答していたD児が、事後アンケートでは「好き」と回答し、その理由の欄に「おいしいし、食べるとみんな笑顔になれるから」と記述していたことから、一人で計画を進めようとしていたD児が、活動を通して「受容感」を得ながら、他者への思いやる心が育まれた様子を見取ることができた。

低学年児童は自我が強く、相手を考えずに自分の感情をおつけてしまう恐れがあるため、教師がそれぞれの思いを整理して伝えることも必要であると感じた。他者と対立し、解消していく経験の中で「受容感」を得ていくことで、他者を思いやる気持ちを育み、相手を考えた発言や行動のできる子が育つことを期待できる。

また、この事例から、個人の「成就感」が他者の「受容感」に悪影響を及ぼしてしまう恐れを知ることができたため、「成就感」と「受容感」という両側面から児童の意欲を育む必要性を強く感じた。

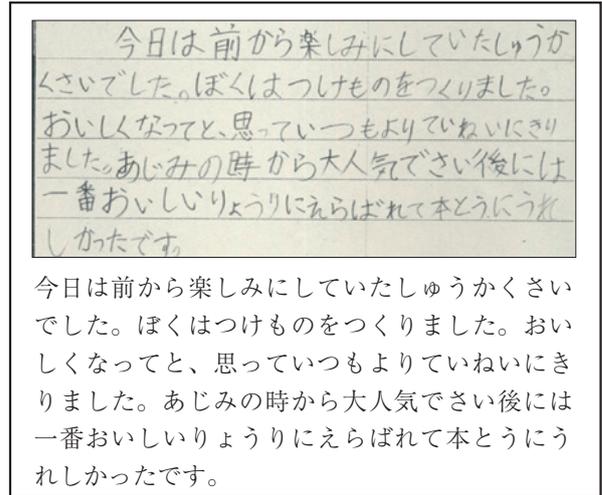
エ F児

F児は思考力が高く、普段の授業でも積極的に発言している。また、栽培活動へ対する意欲は初めから高く、草むしりや世話に関する勉強などを積極的に行っていた。

しかし、収穫祭の計画をグループで話し合う時間では、話し合いに全く参加しようとしなかった。それを見た教師がなぜ参加しようとしなないのか尋ねると、教師にだけ聞こえる声で「自分が育てたナスを自分で全部食べたいから」と答えた。F児が育てたナスがあまり大きく育たなかった背景を把握していた教師が、「先生が育てているナスも分けてあげるから、F君もみんなに少しでもいいから分けてあげて」と促すと、F児は納得し、次の時間からは積極的に話し合いに参加するようになった。

収穫祭では、F児が母親に教えてもらったことを活かして、ナスの漬物を作ってみんなで食べた。図14のワークシートからも自分で作った漬物がみんなに認められ、大きな「受容感」を得ている様子を読み取ることができる。

周りに認められるという「受容感」を得ることによって、より大きな「成就感」を抱くことに繋がる。そのため、教師はただ学習内容を達成させるのではなく、周りとの繋がりを意識して「受容感」を得させるような働きかけを行うことが重要である。



今日は前から楽しみにしていたしゅうかくさいでした。ぼくはつけものをつくりました。おいしくなると、思っていつもよりいねいにきりました。あじみの時から大人気でさい後には一番おいしいりょうりにえらばれて本とうにうれしかったです。

図14 F児のワークシート

IV まとめと今後の課題

本研究では、「成就感」と「受容感」の両側面から意欲を高めることを意識しながら実践に参加したことを通して、「成就感」及び「受容感」と学習意欲とのかかわりや、「成就感」と「受容感」の相互関係の特性について、以下のことが明らかになった。

まず、「成就感」と学習意欲とのかかわりについてである。栽培活動に失敗し「成就感」が育まれないと、次への学習意欲が低下してしまう危険性がある。栽培活動のように、容易にやり直しのできない单元では特に、主体的な活動を児童に行わせながらも、最終的にはできる限り成功体験になるような支援が必要である。

次に、「受容感」と学習意欲とのかかわりについてである。他者とかかわり合い「受容感」を得ながら活動することによって、他者への思いやる心が育まると共に、他者とかかわることのよさに気付き、より学習に意欲的に取り組むことができる。そのため、子どもが他者とかかわる場面を作り出すように意識した单元構成を行うことが大切である。

最後に、「成就感」と「受容感」の相互関係の特性について二つ挙げる。

一つは、個人の「成就感」が他者の「受容感」に悪影響を及ぼしてしまう恐れがあるため、「成就感」と「受容感」という両側面から児童の意欲を育む必要があることである。「成就感」のあり方は児童ごとに異なるため、児童間で協力して活動を行う際に衝突してしまうことがある。例えば、二人の児童の思いの違いによって、喧嘩になったときなどは、二人の児童間の関係が、互いの「成就感」に悪影響を及ぼしてしまっていると考えられる。この時、教師が感情的になっている児童を落ち着かせ、教師がそれぞれの思いを整理することで、それぞれの児童の間で「受容感」が生まれ、両者

が「成就感」を高め合って活動することに繋がる。「受容感」を育むことを通して、他者の考えに耳を傾けることができるようになれば、他者と「成就感」を高め合いながら活動をすることができると考えられる。

もう一つは、周りに認められるという「受容感」を得ることによって、より大きな「成就感」を抱くことができることである。例えば、自分のためだけに野菜を育ててきた児童に対し、教師が他者への働きかけを促すと、その児童は自分が作った野菜を他者に喜んで食べてもらうという経験を通して「受容感」を得て、より大きな「成就感」を得ることができた。ただ学習内容を達成させるのではなく、周りとの繋がりを意識して「受容感」を得させることで自分への自信や次への学習意欲をより高めることに繋がる。

今後はこの授業実践で得られた結果を念頭に置きながら、引き続き冬野菜の栽培活動の授業実践への参加を通して、児童の「意欲」の高まりを見取り、児童の「意欲」についての概念をより明確化していきたい。

【引用・参考文献】

- 1) 中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」2008年1月
- 2) 文部科学省「小学校学習指導要領解説生活編」2008年13頁
- 3) 上掲書 2) 13頁
- 4) 鹿毛雅治『子どもの姿に学ぶ教師』教育出版2007年 15頁
- 5) 奥村一将「栽培活動における意欲の高め方についての一考察」, 愛知教育大学生生活科教育講座紀要『生活科・総合的学習研究』第8号 2010年 119 - 128頁
- 6) 上掲書5) 119 - 128頁
- 7) きうちかつ『やさいのおなか』福音館店1977年
- 8) 大西ひろみ『あっちゃんのはたけ』ひさかたチャイルド2006年